

産学官の女性技術者が 維持管理やメンテナンス学ぶ

中部整備局岐阜国道、岐阜大

中部地方整備局岐阜国道事務所と岐阜大学は2月28日、同大インフラミュージアムで、産学官の女性技術者36人を対象に維持管理やメンテナンスに関する見学会を開催した。トンネルやPC橋などの実物大構造物を前に、工学部付属インフラマネジメント技術研究センターの沢田和秀センター長らから仕組みや構造、現在の工法との違いなどの説明を受けた。インフラ建設と維持管理をテーマに意見交換会も行った。

女性活躍社会の実現に向けた岐阜国道事務所の取り組みの一環として開催した。土木技術者女性の会のメンバー、東海環状自動車道関連工事の現場担当者、コンサルタント、岐阜県土整備部や岐阜国道事務所の職員らが参加した。



見学会①と意見発表

インフラミュージアムは、建設当時の土木構造物の内部構造などを理解するメンテナンスの専門家を育成するため、インフラマネ



ジメント技術研究センターが2017年8月に開設した。大学正門脇の駐車場の一部を利用し、内部構造が分かる輪切り状の「トンネル」、各種の構造が分かる鋸桁端部を集約した「鋼橋」、基本構造や定着部等の構造が学べる「PC橋」、重力

式擁壁や軽量盛り土、アンカーなどの断面構造が分かる「盛り土」の4タイプのモデル構造物を設置。社会基盤メンテナンスエキスパート(ME)の養成講座でも使用している。

女性技術者たちは、鋼橋の合成桁と非合成桁、トンネルで1980年代前半まで採用されていた矢板工法と現在のNATM、ゴム支承と鋼製支承などを間近に見ることで、構造の違いなどを理解した。

意見交換は4班に分かれて行い、最後に代表者が総括して発表した。インフラミュージアムの感想は「内部構造や昔の工法との比較、メリット・デメリットが理解できた」「断面を見ることができて知識が深まった」と好評だった。また、「新設の技術と維持管理の技術は違う。設計から現場まで幅広い知識が必要と感じた」「学生時代は聞くだけの知識だったが、現場を経験して講義を聴くとさらに理解が深まる。学び直しは大切」と、技術者として貴重な経験ができたとした。

女性技術者として目指す方向としては「危ない現場は会社も気を使って配置しない。積極的に手を挙げて経験を積むことが必要」「女性だけの現場もあったらいい」「メンテナンスの現場はトイレなど改善の余地がある」などの意見が出た。

岐阜国道事務所は、今後も女性の視点や感性から見た現場の安全・環境・パトロールや意見交換、勉強会などを開き、女性が働きやすい現場環境づくりを推進する。